

水稻技術情報 No-1

令和6年3月6日

J A 営農支援課

本年種子の消毒における注意点について

令和5年村内産のあきたこまち種子については、昨年の登熟期に高温が続いたため「脱ぷ」、「割れ粃」の発生により農産物検査の結果、準種子の扱いとなりました。発芽試験での発芽率には問題なかったものの、脱ぷや割れ粃が温湯消毒により発芽率を低下させるといった研究報告もあることから、J Aでは温湯浸漬とテクリードCフロアブルによる消毒後の発芽試験を行いましたので、結果及び対策についてお知らせいたします。

温湯浸漬後の発芽試験では、一般的な種子に比べ、10%程度の発芽率低下やバラつきが確認されたため、10%程度播種量を増やすことが望ましいと思われます。

また、本年の種子は登熟期に高温が続いたことにより、**全般に休眠が深く、発芽勢も劣る**ことから、テクリードCフロアブルによる消毒試験においても、発芽が不揃いになりやすい傾向にありました。このため、種子消毒～催芽にかけてはつぎの点に注意を払い作業に当たってください。

【裏面参照】

テクリードCフロアブルでの種子消毒～催芽に関する注意点

【種子消毒】(水温が上がる4月上旬より開始)

- ① 水温が10℃以下と低い場合は、休眠性が逆に深まる場合があるとともに、発芽の不揃いを助長する恐れがあるため水温の確保には十分注意する。
- ② 同一の容器(オケ等)に異なる品種を入れて消毒しない。
- ③ 種子重量の1.5倍～2倍の薬液量、水温10℃～15℃、希釈倍率200倍、24時間で実施する。

1 : 1.5 ~ 2 1.5 ~ 2

※ 使用量例 種子 100 kg:水 150 ℓ ~ 200 ℓ 薬剤 750ml ~ 1 ℓ

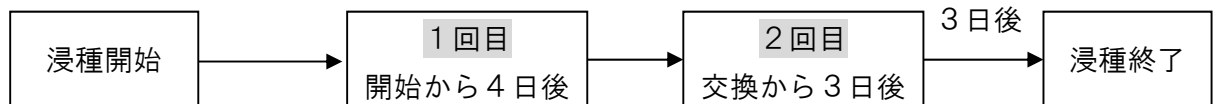
- ④ ハトムネ催芽機等で水温20℃～25℃程度の“ぬるま湯”を作る。“ぬるま湯”を種子消毒する容器に移し替え、テクリードCフロアブルを200倍で希釈する。その後、種子を容器に入れ、フタをして24時間浸漬する。

※ 催芽機を運転しての消毒では、粉の割れた部分より薬剤が侵入しやすく、薬害が懸念されることから、消毒中は水を動かさない。

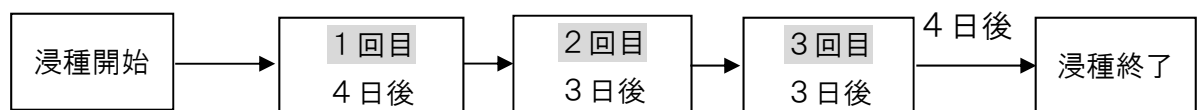
【浸種】

- ① 同一の容器(オケ等)に異なる品種を入れ浸種しない。容器にフタをする。
- ② 浸種の粉と水量との重量比は1:2程度とする。例:種子100kg:水200ℓ
- ③ 浸種時は消毒時と同様に“ぬるま湯”から開始する。気温の低い日が続く場合は、水交換の際に“ぬるま湯”を足すなど、水温を確保するのが望ましい。
- ④ 水交換の回数は10日間で2回、14日で3回程度を目安にする。1回目の交換までの日数を長めにする。

(交換のローテーション例・浸種10日間の場合)



(交換のローテーション例・浸種14日間の場合)



【催芽】

- ① 異なる品種を同時に催芽しない。
 - ② 品種毎に催芽機内を(水洗い)洗浄する。
- ※ 催芽中に泡が発生する場合もあるが、発芽や生育への影響は無い。

※ 農薬の使用に当たっては使用方法を確認し、環境に配慮した施用量等を心がけてください。

「水稻技術情報」<https://www.ja-ogata.or.jp/farming2/>をホームページで閲覧の際は、これまで必要だったパスワード入力なしで閲覧可能になりました。

※ 水稻以外の技術情報は、これまで通りパスワードの入力が必要です。